C—85　ロココの造形と服飾

静岡女大家政　　船渡千穂子

1.　十八世紀フランスを中心とした西欧の服飾様式を通して，十八世紀ロココ文化の中心をなした人々の美意識を捉えることを目的とし，その方法を，広く他の生活造形との様式的つながりのなかに求めることにした。

ルイ十四世の死と共にはじまるオルレアン公フィリップの摂政時代にその萠芽を見出しルイ十五世の治世にかけて花開いた造形は，ロココ様式と称され，その装飾の豊かさは，その時代の人々の快楽追求の生き方と相俟って，積極的な意味をもつようになった。その装飾は，“表面に生命を与える”のみならず造形そのものを装飾化してしまった。ロココの時代の人々にとって，装飾豊かな衣裳に身をつつむことは，室内空間を一つの調和ある装飾集団とみなすロココの造形理念に積極的に参加し，その装飾集団の中心をなすことであったにちがいない。女子におけるロココ服飾の到来は，パニエの名のもとに大流行を示すフープ・ペチコートによってつげられ，なかでもフランス型ローブは，衣褶の美，形態感，表面装飾と，まさしく服飾のもつ美的訴えのすべての要素を見事に調和させ，全体を一つの装飾にまで高めたものといえよう。